



女性研究者のキャリアを考える

研究と子育て：追い風に乗って

吉野 知子



私は、任期付研究職最終年度を迎えた二児の母である。任期付職の多いアカデミアの世界は、研究と子育ての両立を目指す女性研究者にとっても決して楽な世界ではない。一方で男女共同参画社会基本法が公布・施行されてから10年が経過し、女性研究者への追い風となる新しい制度が次々とつくられている昨今である。ここでは、研究と子育てに奮闘する日々について、自身の体験談を紹介することとする。これから同様の経験をするであろう若い男女の研究者が、何かを感じて頂ければ幸いである。

研究職の楽しさ

私は、「生物が作り出す物質やその生成メカニズムを理解し、新規の機能性マテリアルを創製することにより、人の健康や環境保全に役立つような研究」を目指している。生命工学科に身を投げてもうすぐ15年。私を虜にした研究とは長い付き合いになりそうだ。

大学入学当時は新設の学科であった生命工学の分野は、急速に発展し、さまざまな研究分野と融合・調和して、存在感を増している。とりわけ分子生物学は、他の自然科学の分野と比較すると新しい学問であり、DNAの構造が解明されてからわずか半世紀あまりで人工ゲノムの設計・合成が可能時代に突入し、発展のスピードは目を見張るものがある。私は幸運にもこの学問に出会い、魅了され、気づけば研究職の道に進むこととなった。研究に終わりはなく、実験すると謎が増えていく、でもその謎を解くために、また前へ突き進む。難問にぶつかることも多いが、その壁が高ければ高いほど、壁を登ってまたは壊して突き進めた時の感動は大きい。学生との研究ディスカッションの最後に、「おもしろいね……」と言い残すことが多い。研究を楽しんでいる姿を学生の目に焼き付けたいという面もちろんあるが、いつも心からそう感じている。どんな状況でも「楽しむ」こと、研究と子育ての両立を可能とする一つの要因であることは間違いない。

任期付研究職と出産・育児の現状

私は学位取得後、早稲田大学にて任期付の研究職を頂き、その後東京農工大学が実施しているテニユア・トラックポストの教員に幸運にも採用して頂いた。アカデミアにおいては、学位取得後からテニユアの職を得るまでの数年間は、以後の研究基盤を形成するために非常に重要な時期であるとともに、結婚や出産・育児といったイベントに直面する時期となり、男女問わず多くの若手研究者にとって、不安と期待の詰まった時期といえる。私自身も現在その真っ直中におり、悪戦苦闘の日々を送っている。

任期付の研究職において重要なのは、短期間に目に見える形で業績を表すことである。論文執筆、学会発表、研究予算の獲得、学生指導、その他社会貢献と求められることは数多い。私自身、二児の子の出産時期はともに任期付中であり、長期休暇が制度的に許されていても、これからの研究活動への支障を考え、産後は育児休業を取得せずに復帰した。この選択が正しかったかどうか、考える余裕もなく復帰したというのが正直なところである。母体への負担は大きく、また子供のためには必ずしも良い選択とは思わない。せめて授乳期だけでも、と思うのが多くの母親の願いかと思う。ただ、限られた時間の中で成果を問われている現状と、第一線のサイエンスを目指す者として妥協したくない思いが、早期復帰を選択させた。復帰後は、徹夜作業が普通であった研究スタイルを変えざるをえなかった。スタイルを変えることは至難の業であったが、ライフスタイルに合わせた研究スタイルの変更も必要であると実感した。

産後の乳飲み子を抱えての研究は正直辛い。授乳や夜泣きによる年中睡眠不足が続き、もうろうとした中での研究であるため効率も悪い。次の図は、私が所属する東京農工大学の女性未来育成機構よりお借りしたイラストである。復帰後の待たなしの仕事量と待たなしの子供の叫びに葛藤する状況をリアルに表現している。最後



は赤ん坊をひざに抱え、授乳しながらパソコンをうち仕事を行う結末、任期付研究職と乳飲み子、という矛盾した状況を打破するのは容易ではない。ただ生きていくなかでこのような矛盾した状況はしばしば起こることである。それでもあきらめずにしがみついていくことが、この時期にできる唯一の選択肢なのかもしれない。

女性研究者のための制度・サポート

文部科学省では2006年度から、科学技術振興調整費「女性研究者支援モデル育成」を実施し、40の大学、5つの独立行政法人において、研究環境の整備や意識改革など、女性研究者が研究と出産・育児等の両立や、その能力を十分に発揮して研究活動を行えるための仕組みを構築する取り組みに対して支援している。また2009年度より、「女性研究者養成システム改革加速」事業が新たに加わり、5大学が採択された。1999年に男女共同参画社会基本法が公布・施行されて以降、特にこの5年の間に女性研究者への追い風となる新しい制度が相次いでスタートしている。私が所属する東京農工大学においても、上記事業への採択により、大学内における支援制度の設立・改革が大きく行われた。実際に同制度を取り入れた大学における男女共同参画への取り組みは効果的であり、各大学における女性教員増加を目指した達成目標の設定や委員会の設置、また保育施設の整備や育児支援制度の導入が実施されている。私自身、同大学が独自で実施している妊娠・出産・育児期に合わせた研究支援員の派遣制度を何度も利用させて頂いた。特に出産期においては、産前産後休暇を含む6ヶ月間は、この制度により専任の研究員を配置することが許され、研究への影響を最小限にすることができた。出産を挟む産休期間は研究活動はできず、またその時期が終わったとしても産休前の研究生活に戻るまでにはかなりのリハビリが必要であるため、その効果は大きい。余談であるが、私の産休中に来て頂いた研究支援員の方は、出産予定日3日前に大きなお腹を抱えながら自身で面接を行った記憶がある。その彼女は、1年近く研究支援員を行って頂いた後、今年度より同分野の博士過程進学を決意し、現在も一緒に研究を行っている。こんな巡り合わせも、この制度の恩恵の

一つといえる。

また、これらの制度を有効に活用できるようなサポート体制も整いつつある。「妊娠・出産・育児のための事務手続きガイドブック」と書かれた冊子が学内で配られた。そこには出産や子育てに関する数々の制度や手続きがわかりやすく解説されていた。長男を身ごもった5年前には、前職の大学を含むほとんどの大学において情報収集が困難であり、事務方、諸先輩方、市役所やインターネット、書籍などを駆使したことを思い出す。このような一つ一つの取り組みが研究と子育ての両立を目指す女性研究者にとってはありがたい。

これらの制度やサポートは完璧なものではなく、きっかけに過ぎない。ただ、男女共同参画は、半ば強制的にでも始めなければ、日本の根強い風潮のもとでは女性研究者の比率は増加しないと感じる。数々の女性研究者に追い風となる制度や意識改革により、私たちは徐々にではあるが確実に研究と子育ての両立に適した環境に身をおきつつある。追い風が吹いている。この風に乗って研究を楽しむことが今できることだと切に感じる。自身がこの両立に葛藤する日々を実感する中で、いかに諸先輩方が苦勞されたかは言うまでもなく、またこのような制度を活用してこれから立ち向かうであろう後輩研究者に対するさらなる制度構築に貢献できればと考える。

ビジョンと道

人生において自分自身でコントロールできることは限られており、理不尽や矛盾のある制度や情勢もある。さまざまな不平等の中にも共通しているのは、みんな平等に年をとることである。そんな中で私は以下のことに重点を置いて、自分の生き方を考えてきた。一つ目は、『ビジョン』である。特に、女性研究者においては、結婚や出産・育児も含めたビジョンを早い段階で持つことが、その後の人生に大きく影響を及ぼすと感じる。もちろん、それは変わっていくものであっても、また実現不可能であっても良い。もう一つは、ビジョンを達成するための『道』を時間軸と共に設計することである。そのために、多くの人の生き方を参考にすることも方法の一つと考える。これはロールモデルを探すわけではなく、いつ何をしたらどうなったのか、という事例をいくつも分析することで自分にあった最良の道を設計できるのだと思う。あとはどんな険しい道であってもあきらめずに進み続けること。研究も人生も方法論は同じと感じる。

おわりに

自身のことを赤裸々に語ることは、正直恥ずかしい。ただ、女性研究者はもちろん、男性研究者、そしてその上司の皆様にも事例を紹介できればと思い執筆した。最後に、研究と子育ての両立を可能とした一番の要因は、私の周りにいる方々のご理解とご協力の賜であり、心より感謝したい。